

合材工場を都市ガス化

CO₂排出量削減へ

08年度までに9カ所



NIPPOは、アスファルト合材の製造に使用する燃料を重油類から都市ガスや灯油などへの切り替えを進めている。製造に伴って発生する二酸化炭素(CO₂)の排出量を削減するのが狙いで、08年度末までに162カ所の合材工場のうち9カ所を都市ガス化した。省エネルギー型の設備や機器類の配備にも力を入れており、18カ所の工場で「ハイブリッドバーナー」と呼ばれる広範囲な燃焼制御が可能となる高効率バーナーを導入。今後も計画的に導入工場を増やしながら、合材製造における環境負荷の低減に取り組む構えだ。

化石燃料や電力などを使用するアスファルト合材の製造では、地球温暖化につながるCO₂の排出量を削減するほか、周囲の環境に悪影響を及ぼさないよう、細心の注意を払って、対策を行う必要がある。

同社がここ数年で力を入れてきたCO₂削減では、都市ガスや灯油などへの切り替え、省エネ設備の導入を順次推進。05年度に36万2070トンだった合材工場での排出量は、06年度には工場数の増加もあって36万2969トンに増えたが、07年度に35万2880トン、08年度には31万1830トンと徐々に下がっている。

製造時のCO₂排出量を削減するために同社は、材料に特殊添加剤を加える中温化技術の導入を進めている。これを工場設備の改善と組み合わせることで、排出量を

段と削減させるのが狙い。合材工場にとっては重要なテーマ。同社では、

CO₂排出量削減に加え、窒素酸化物(NO_x)、周辺の大気汚染対策(硫酸酸化物(SO_x))、

ばいじんなどの排出量を測定・管理するほか、法令基準を上回る性能の集じん機の整備、製造工程で粉じんを飛散させない設備などの設置といった対策も講じている。

また、騒音や粉じんの発生に伴う近隣からの苦情に対しては、都市部にあり、12工場に脱臭炉を整備しており、今後もプラントの更新にあわせて環境整備や環境投資を続けていく考えだ。

日刊建設工業新聞
平成21年9月30日掲載